



第22回日本医療マネジメント学会学術総会開催報告

病院ビッグデータ革命 ～データ活用による「医療の質」 「医療・介護連携」の飛躍(Leap)を求めて～

三 木 恒 治

第22回日本医療マネジメント学会学術総会会長／済生会滋賀県病院院長

第22回日本医療マネジメント学会学術総会を2020年10月6～7日に、京都・みやこめっせ、ロームシアター京都、平安神宮会館にて開催させていただきました。本学会は当初、クリティカルパス、医療安全などをメインテーマとして発展してきました。しかし現在では、チーム医療、ワークライフバランス、医療介護連携など、もっと幅広く医療に関するすべてのマネジメントを包括する多職種が集う学術総会となり、会員も9,000人と大規模な学会となってきました。

京都市での開催は、第13回学術総会以来、9年ぶりとなります。当初は6月26～27日で開催の予定でしたが、新型コロナウイルス(COVID-19)感染症拡大の影響で、本年10月6日(火)・7日(水)に、延期開催することとなりました。参加者は当初約5,000人を見込んでおりましたが、コロナの影響で、最終的には約2,500人の参加になり、少し寂しい学会となりましたが、一般演題も1,000題の応募をいただきました。

さて、近年の医療マネジメントにあたっては、情報の管理・分析、その有効活用が大きな課題となっています。わが国の“未来投資戦略2018”に記載されているように、世界では、ICT機器の爆発的な普及や、AI、DX、ビッグデータ、IoT等の社会実装が進む中、社会のあらゆる場面でデジタル革命が進み、デジタル新時代の価値の源泉である「データ」をどう生かすかが大きな課題といえます。その典型例がDPCの開発と厚労省のNational Database(NDB)などの情報公開によ

る分析と活用であると思われます。DPCデータの活用の実例としては、クリティカルパスの評価や診療実績、Quality Indicatorのベンチマーク比較、評価等々が挙げられます。

医療に限らずビッグデータ革命は、示された数字にとらわれるのではなく、主体的にビッグデータを扱い、活用することを意味しています。病床大再編時代の鍵を握るデータの活用には、人口、病床というマクロな視点から、ベッドサイドの医療の質というミクロな視点を紐付けることができる医療者の進化が不可欠といえます。そして健全な医療を提供し続けるためには、今まで以上に病院、施設の健全経営、さらには寄って立つ地方自治体の財政健全化が必須となります。そのためにはデータの分析が必要であり、「病院ビッグデータ革命」を支えるデータ分析の大きな飛躍が不可欠であるとの思いで、今学術集会のメインテーマを「病院ビッグデータ革命～データ活用による「医療の質」「医療・介護連携」の飛躍(Leap)を求めて～」と致しました。

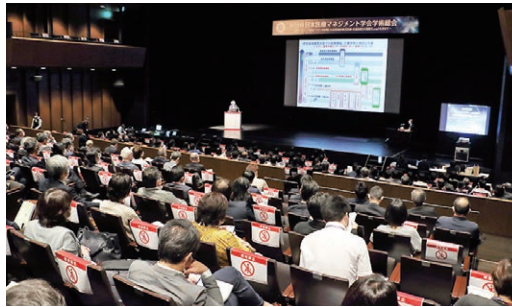
10月6日の開会式には、三日月大造滋賀県知事よりビデオレターで祝辞を賜り、また門川大作京都市長にご参列いただき祝辞を賜りました。グローバルMICE都市として京都市は年間300件以上の国際・国内会議が開催されておりましたが、2020年は新型コロナウイルス(COVID-19)の影響で数件になっており、学術総会の現地での開催を温かく歓迎していただきました。

プログラムでは、基調講演、会長講演のほか、

招待講演3題、特別講演3題、特別企画1題、教育講演6題、教育セミナー2題、シンポジウム12題等のプログラムを実施いたしました。学会では定番のクリティカルパス、医

療安全、働き方改革、特定看護師、医師事務作業補助等々のテーマとともに、まずビッグデータやAIについて総論的な知識を知っていただくために、WEBの特別企画で、公益財団法人がん研究会がんプレジジョン医療研究センター長、内閣府戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）AIホスピタルプロジェクトディレクターの中村祐輔先生に「内閣府AIホスピタルプロジェクト」と題して、本年から実際に取り組んでおられる4施設でのプロジェクトの内容を分かりやすくご講演いただきました。特別講演1では自治医科大学学長 永井良三先生に「医療に生かすビッグデータとAI」というテーマで国の革新的研究開発推進プログラム（ImPACT）のヘルスセキュリティプロジェクトのプログラムリーダーとして取り組まれた心関連疾患リスクシュミレーター開発サブプロジェクトのご講演をいただきました。特別講演2では大阪大学の大先輩である日本医学会会長の門田守人先生に「医学・医療の向かう道」を、さらに教育講演1では滋賀大学データサイエンス学部長 竹村彰通先生に「健康医療のためのデータサイエンスー滋賀県長寿の要因分析を例として」データサイエンス構築の重要性を滋賀県の具体例をお示しいただきながらお話しいただきました。そのほか特別講演・教育講演など22題の内容の濃い講演が展開されました。10月6日には、三木が「病院は今、大再編時代を迎えている。病院や福祉施設が質の高い医療と介護を提供するためには、情報の管理と分析、そしてデータを有効活用して、健全な病院経営を実践することが求められる」と会長講演をさせていただきました。

また具体的なビッグデータ活用例としてとし



て、シンポジウム1、「ビッグデータの利活用と課題」でDPCデータのマネジメントツールとしての活用、医療の質・看護の質評価での活用等を、シンポジウム10の「ビッグデータとICTが変える病院医療」では実際の病院医療への影響を、さらに「医療と介護のビッグデータ戦略」、「AIで介護革命、豊富なデータで最適な介護ケアを導き出す試み」等々の12題のシンポジウムが行われました。

一方ランチョンセミナー、モーニングセミナー、アフタヌーンセミナー等27の企業の協賛による各セミナーもほぼ満席で、多くのご参加をいただきました。

さらに心のケアのプログラムの招待講演として「いのちの看取りの物語」を平等院住職神居文彰先生と、公益財団法人日本対がん協会会長・国立がん研究センター名誉総長の垣添忠生先生に「人はがんとどう向き合うか？」というテーマで、心に響く講演を聞くことができました。

コロナ感染症の拡大の中、本来なら他の学会に倣ってWEB開催も考えましたが、本学会は多職種の学会ですので、WEB開催では参加者が集まらないのではないかと危惧し、またコロナの感染状況なども自分なりに分析して10月なら流行も下火になっているのではと自己流に考え、現地開催にこだわりました。多くの方々から、本当に現地開催をするのですかと言われましたが、約2,500名の参加者、約1,000題の一般演題の発表があり、各セッションで熱心な討議がなされ、また学会の終了後の主なプログラムのオンデマンド配信では、約1,000人のアクセスをいただき、何とか学会でのクラスター発生もなく、一応成功裏に終えられたのではないかと考えております。